

# 市民農園におけるサードプレイス機能とソーシャル・キャピタル醸成に関する研究 —コミュニティファーム「ゆい」を対象として—

建設工学専攻 2416006 黒澤 順  
研究指導教員 森田 哲夫

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景

都市部では生活の個別化や職住分離の進行により、地域住民同士が日常的に接点を持つ機会が減少している。このような状況の中で、家庭や職場以外に人々が自然に集い、緩やかな関係を形成する場として、サードプレイスの重要性が指摘されている。こうした場合は、信頼や互酬性を基盤とするソーシャル・キャピタル形成の土台となる可能性を有する。

### 1.2 研究の目的

本研究の目的は、市民農園がサードプレイスとしてどのように機能してきたのかを時間軸に沿って把握するとともに、市民農園におけるソーシャル・キャピタル形成の過程を明らかにすることである。

### 1.3 既往研究と本研究の位置付け

サードプレイスや市民農園に関する既往研究では、場が交流や生きがい形成に寄与すること、場への継続的なかわりがサードプレイス機能を支えていることが示されている。一方で、特定時点での分析にとどまっており、場の形成過程や機能の変化を時間軸に沿って検討した研究は限られている。

そこで本研究では、コミュニティファーム「ゆい」(以下「ゆい」)を対象に、開設以降の年表データおよび利用者データを用いた時系列分析を行い、サードプレイスとしての機能がどのように顕在化・維持されてきたのかを整理する点に特徴がある。

## 2. 研究方法

### 2.1 研究対象地

研究対象地は、前橋市に位置する市民農園「ゆい」である。「ゆい」は2009年10月に開設され、区画貸し方式を基本としながら、イベント等を通じて利用者同士の接点が継続的に生まれる運営形態を有している。図1に「ゆい」の立地を示す。

### 2.2 分析方法

分析方法は、サードプレイス、ソーシャル・キャピタルの評価軸の作成の後、年表分析、利用者データ分析の二段階で構成する。その後、アンケート調査を行い、利用者の居場所認識や他者との関わり方を把握し、分析結果の妥当性を補足的に検証した。

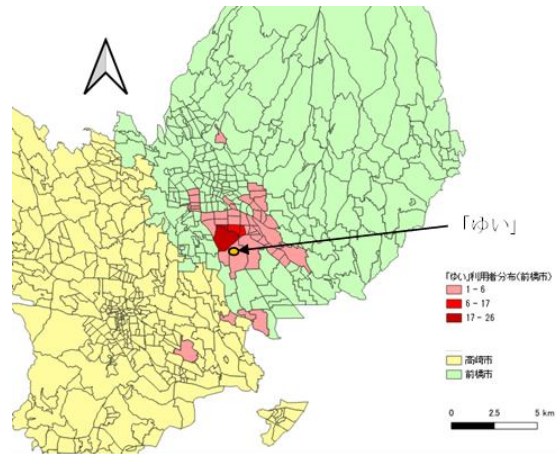


図1 「ゆい」立地

## 3. 分析

### 3.1 評価軸

「ゆい」を分析するにあたり、サードプレイスとしての成立に関する評価軸と、成立した場の上で生起するソーシャル・キャピタルに関する評価軸を設定した。サードプレイス性については、場としての成立を判断するため、空間的・制度的条件に着目し、同時利用が可能な規模が安定的に確保されているか、また利用が反復的・継続的に生じているかを評価の軸とした。一方、ソーシャル・キャピタルについては、サードプレイスとして成立した場を前提として、利用者間にどのような関係構造が形成されているかに着目し、検討を行う。

### 3.2 サードプレイス性に関する分析

年表分析の結果、「ゆい」は2011年前後を境に制度・運営および活動内容が安定していることが確認された。これを踏まえ図2を見ると、2009年から2011年にかけては利用者数や新規参加者数、退園者数の変動が大きく、利用者構成は流動的であった。一方、2011年以降は新規参加者数および退園者数が

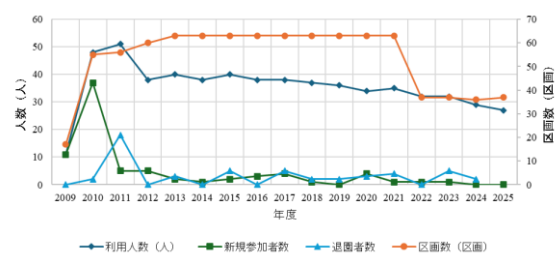


図2 利用者数・新規参加者数・退園者数・区画数



図3 常連率(左)

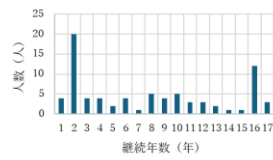


図4 継続年数別人数(右)

低水準で推移し、利用者数および区画数も大きな変動を伴わず安定している。このことから、2011年以降、「ゆい」では同時利用が継続的に可能な規模が維持され、場としての利用が定常化していたと考えられる。さらに図3、図4より、2011年以降は複数年にわたり継続利用する利用者が一定数存在しており、利用が短期的・偶発的な参加に依存する段階から、反復的な関与が生じる段階へと移行していたことが読み取れる。以上より、同時利用規模の安定性および関与の継続性という判定基準に基づけば、「ゆい」は2011年前後においてサードプレイスとして機能していたと判断できる。

### 3.3 ソーシャル・キャピタルに関する分析

図3、図4を見ると、2011年以降は複数年にわたり継続利用する利用者が一定数存在しており、利用者構成は安定している。このことから、「ゆい」では、利用者間の関与が一過性にとどまらず、反復的・継続的に生じうる構造が形成されていると考えられる。また、図1を見ると、近隣地区からの参加が中心である一方、地理的に異なる地域からの参加も継続的に確認される。以上を踏まえると、「ゆい」では長期利用者を中核とした結束型ソーシャル・キャピタルが蓄積されてきた可能性が高いとともに、橋渡し型ソーシャル・キャピタルが生じうる構造的基盤も併せて有していると判断できる。

## 4. アンケート調査

### 4.1 アンケート調査概要

表1にアンケート調査の概要を示す。動機や目的、居場所感、他者とのかかわり方、意識や行動の変化はその発生・変化の時期等も併せてお聞きした。

### 4.2 アンケート調査分析

まず、全ての項目で基礎集計を行った後、利用開始からの経過年数を軸にクロス集計を行い、認識や交流がどの段階で顕在化するのかを整理した。加えて、居住地と交流の有無のクロス集計により交流の広がりを検討し、交流開始時期と意識・行動の変化の関係を分析することで、ソーシャル・キャピタルが段階的に醸成される過程を補足的に確認した。

表1. アンケート調査概要

調査名	市民農園利用実態および居場所認識に関するアンケート調査
調査対象	「ゆい」利用者 (27名)
調査方法	紙面によるアンケート調査
調査内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>基本的な利用状況</li> <li>利用動機や目的、その変化</li> <li>「ゆい」への居場所としての認識</li> <li>他の利用者との関わり方や交流</li> <li>意識や行動の変化</li> </ul>

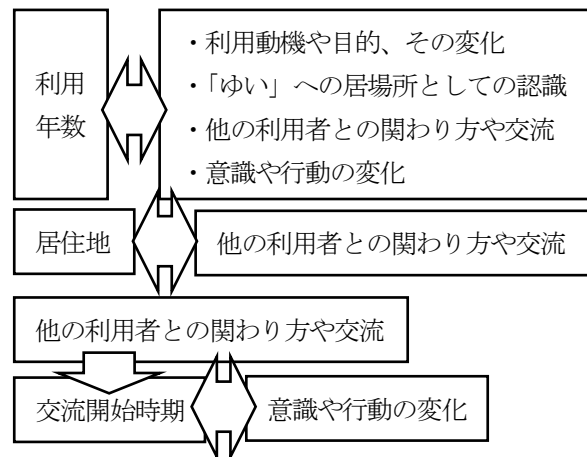


図5 分析方法

## 5. まとめ

以上の結果から、市民農園は単なる余暇活動の場にとどまらず、時間の経過とともにサードプレイスとしての機能を獲得し、異なる段階のソーシャル・キャピタル形成を内包しうる場へと変化していく可能性を有していることが明らかになった。一方で、本研究で用いた判定基準および分析結果は、あくまで利用実態に基づく評価であり、利用者が場をどのように認識し、他者との関係をどのように経験しているかについては十分に把握できていない。

### 参考文献

- 湯沢昭：“市民農園の利用者特性と効果に関する一考察”、日本建築学会計画系論文集、第77巻、第675号、pp1095-1102、2012。
- 樹野光路：“老年期のサードプレイスの持続可能性-ソーシャル・キャピタルから考える-”、大正大学研究紀要、第一〇八輯、pp.119-134、2023。
- 湯沢昭：“地域課題共同研究プロジェクト研究費計画書”、2011。